

## 第八章 青年会議所

### 小野青年会議所入会から卒業まで

滝野町に帰ってすぐ、税理士の先輩で小野青年会議所（現社団法人小野加東青年会議所）の理事長をされていた税理士の西尾茂己先生の推薦により、地元の青年会議所（以下J.C.という）に入会させてもらった。

小野J.C.は、毎月六日の午後六時から小野商工会議所で例会を開いている。二十歳から四十歳までの青年が、会員相互の修練を中心にして、奉仕、友情を基調とした事業を行い（友情・奉仕・修練をJ.C.の三信条という）、地域の指導者となり、同時に、J.C.で学んだことを自己の企業に持ちかえることに大きな魅力を感じた。

テリトリーは小野市・加東郡三町（後に加東市）で「小野加東はひとつ」は、事業活動の大きなテーマであった。経済団体は、日経連、経団連、経済同友会、日本商工会議所などというが、J.C.は経済団体ではない。また、ロータリークラブや、ライオンズクラブなどの奉仕団体

や社交団体でもない。JCを卒業した多くの元会員が、経済界や政界で活躍している現在でもこの考え方は変わっていない。青年が、青年らしく生きる道場のような組織であった。

私は、昭和四十五年から五十六年までの十二年間在籍し、多くのことを学んだ。私が入会した四十五年は高度成長期の後期であった。大阪で万博が開催され、まだ世の中に勢いがあった。創立五周年を機にはじめた「小野・加東ソフトボール大会」をはじめ、「献血友の会」を組織して献血推進事業を行っていた。毎年一月の例会は、小野・加東の四人の首長から郷土の未来像などを聞いていた。

小野JCは、創立当初は修練団体であるという認識から「青年重役会」と称して、「経営者開発」に重点を置いた事業を行っていた。昭和四十六〜四十七年頃から、明るい豊かな郷土づくりを目指し、住民会議を開催して「社会開発」と「指導力開発」がJC事業の両輪だと言われていた。

四十六年八月、突如日本を襲ったニクソンショックと、それに続く変動相場制移行・円切り上げにより景気は後退した。それまで高度成長の波に乗って順調に推移していた地元の中小企業の業績にも陰りが見えていた。この頃から会報等に、いろいろな分野の小論を書いた。

今読み返してみると、未熟な記述も多いが、引用先を正確に明示して、当時の学者や新聞等で採りあげられていたテーマをよく整理して所論を展開している。以下に二題抜粋して掲載す

る。

これからの企業経営に想う（JIC会報 昭和四十八年六月六日）

最近の中小企業をとりまく経営環境の変化は地場企業にとつても例外ではない。①円の実質切り上げ。②環境保全への厳しい監視 ③福祉型経済構造への要請等々はすべて、過去の技術革新優先（重視）から、人間重視（尊重）への社会的傾向を表している。まさに、激動の七十年代「世の中変わった」なのである。

経営環境が激変する中で、中小企業に「知識集約化」が叫ばれて久しい。「中小企業白書」（四十八年版）では、知識集約化のために、①市場動向調査、情報収集 ②デザイン開発 ③研究技術開発 ④製品の高級化、高加工度化 ⑤新製品の企画開発……等々の新しい経営活動の必要性を説いている。

また、白書は、知識集約化のために ①成長、安定業種への転換 ②マーケティングを始めとする経営活動の充実等々多くのことを示唆している。

一方、知識集約化の波は、今後、産業構造全体に及ぶから、知識集約化の担い手たる知識労働者の需給ギャップは、五十五年には約三〇万人にのぼるとする調査がある（日経ビジネス四十八年五月十四号）。従って、この事態を今から予測して、①女子労働力を知識労働者とし

て活用する。②非知識労働力を再教育することによって、知識労働力化を図る。……等々は早くから考慮してかからなければならない。

次に、急速に進む経営環境の変化の中で、知識集約化を進めていくためには、経営者ばかりでなく、従業員一人ひとりの衆知を生かして、新しい創造性を発揮する衆知経営（全員経営と言ってもよい）の実践が効果的である。

この衆知経営を成功させるためには、①集団内（社内）の対話と各人の共通体験により、衆知を集め、新しい創造性を生み出す。②従業員一人ひとりが、全体における各自の役割、使命、責任感に目覚め、各自の立場で何をなすべきか、自ら考え、問題解決を行う自主責任経営の実践。③上記の実践において、トップマネジメントは、実践的経営活動の指針たる経営理念を明確に持つていなければならない。トップの力強いリーダーシップは、その明確で確固たる経営理念の存否にかかっているからである。

衆知経営の実践は、ワンマン経営や大規模組織経営では、人間の理解（こころの理解）に限界があり、最近のように働く力と意欲のある者に職があり、職ある者に相応の報酬がある豊かな社会では、人は経済的理由のみで働いてくれないという人間の価値観の変化から起こってきたものである。

従業員一人ひとりに生きがいを与え、現在および将来に向かって、常に緊張状態の中で経営

活動を続けるためにも衆知経営の実践は効果的であろう。(以下省略)

※ニクソンショック後の昭和四十九年、経営環境が大きく変化していることに対応して、経営の知識集約化を訴え、衆知経営(全員経営)にヒントを求めている。

その後、中小企業の知識集約化は進んだが、衆知経営(全員経営)は認知されることはなかった。中小企業は、相変わらずトップダウンの経営が多いが、大企業の「現場力」尊重主義は、日本型経営の特色のひとつになった。中小企業の知識労働者の需給ギャップと大企業との人材構成の違いは今でも埋めがたい。

昭和四十九年は、小野J.C創立十周年記念の年度であり、理事長は、関学の先輩である土肥芳郎さん、実行委員長は中島國男さんであった。入会して間もない私が直接担当したのは、記念誌の発行とJ.Cニュース住民版の編集であったが、記念式典と伊東ゆかり、佐川満男ショーの開催では(五月十九日)、芸能プロとの交渉や、チケット販売に、関学商学部と同級生である森田剛彰君(神戸国際ステージ)と何回も交渉した。

そのほか、前総理大臣佐藤栄作氏と、参院議員安西愛子氏を招聘して記念講演会(五月二十六日)、ユニチカ貝塚の選手を囲んで模範バレーボール大会(八月十七日)、東条町役場前に記念植樹が行われた。今から考えるとすごい十周年であった。これから五年後に、私が理事長に

なって、十五周年事業を行うことなどまるで考えられなかった。

日刊紙大の「JCニュース住民版」を編集し、小野・加東全域に配布した。二面の主張欄に、会員四人が経済、教育、経営、政治の分野別に所論を展開した。私は、経営に関する小論を書いている。内容は前年に書いた「これからの企業経営」を地域の現状を考慮してさらに具体的に展開している。

経営の知識集約化でガツチリ儲けて安定経営（JCニュース住民版 昭和四十九年五月十二日）  
四十八年八月の資材不足をきっかけに、年末の石油ショックで加速、急上昇した物価も、最近ではようやく一段落したものの、一年間に五回、計四・七五パーセントの公定歩合の引き上げは、中小企業を金融面で大きく圧迫しているばかりか、生産性の向上や、労働力確保の点でも常に大きな課題を与えている。

こうした経営環境の中で、今後いかにして未来志向の安定した経営を行うべきか考えてみた。四十七年中小企業政策審議会の「七十年代の内外情勢の激変下で、中小企業が新たな発展を期する道は、知識集約産業構造を積極的に志向し、それに適応することである」と述べている。

これは、生産活動を、資本と労働以外の第三の要素、すなわち知識あるいは情報を集約化して、知的経営活動を高め、企業の成長、発展の機会を得ようという発想である。具体的には、研究開発、デザイン開発、専門的判断その他高度の経験、知識に支えられた技能の發揮などにより、広く経営活動での人間の知的能力の行使を意味する知的経営活動の集約度を高めてゆくことである。(中略)

小野・加東一帯には、そろばん、金物、釣り針、播州織等の伝統的地場産業がある。これらの業界は、知識集約化が図りやすく、またその必要性に直面している業界ではないか。中でも、消費の多様化と流動化で、製品のライフサイクルが短縮する傾向があるため、絶えざる新製品開発は今後ますます必要になる。

また、知識や情報への投資は、個別企業の努力によるよりも、業界ぐるみで強力に行うのが有効な場合がある。特に海外市場動向調査などはそうである。

小野・加東一帯の多くの中小下請け企業の知識集約化は、いかにすれば効果的であるか。ひとつは親会社の協力工場化であり、もうひとつは自主独立化である。もちろん下請企業の協力工場化に、①安定受注 ②両者合意の単価決定の二点は最低限必要である。さもないと、親会社との支配従属関係は断ち切れず、中小下請企業は、何時までたっても親会社の利益または操業度の調節弁から脱しきれないからである。

一方、自主独立化は、中小下請企業が、過去に研究開発への十分な投資を行っていないため困難なことが多い。納入親企業を多角化し、自主製品、自主技術を開発して、専門メーカー化することが必要である。自主技術の向上は、協力工場化、自主独立化によらず重要である。

中小商業の知識集約化は、大型店舗化が専門店化に尽きる。それらは価格以外の要素で顧客を惹きつけるからである。

以上の知識集約の具体化に共通して言えることは、経営者の強烈な自己啓発と問題意識が必要であるということである。

ニュートンが林檎の落ちるのを見て万有引力を発見し、ゲーテンベルグがぶどう搾り機を見て印刷技術を発明したというのも、当面する問題に対して強力な問題意識を持ち、絶えず自己啓発を行っていたからである。知識集約の具体化により、中小下請企業も、卸小売業もガッツリ儲けて安定経営のチャンスをつかもう。

※現在、地元で成功されている企業には、この時期に知識集約の具体化を進め、それ以後、大きく発展した企業が多い。アメリカやヨーロッパ視察団に加わり製造や販売のヒントを得てきた会社経営者も多い。作れば売れた高度成長期に、資金を浪費せず留保して、その後の不況期に設備を更新し、新製品や新分野進出を図り、大発展された企業も多い。

工業高校を卒業し、農家の納屋を工場に建改造して、下請工賃仕事を開始、今では立派



な工場主となっている社長も多い。当時の時代背景を考えながら、読み返してみると面白い。私は四十年間、このような小論を書いてきた。

五十年五月の青年重役会に、関学の先輩で、桃山学院大学助教授であった来住元朗先生を招聘し、「不況下におけるマーケティング戦略」と題する講演会を企画した。会員にとって大学レベルの高度な内容で、もとは英語のカタカナ熟語がポンポン飛び出し、初めて聞くマーケティングの講演が、どれだけ理解されたかは分からないが、私は久しぶりに来住節を聞き懐かしかった。来住さんとは五十九年末から六十年初に二週間、二人でアメリカ西海岸四都市を旅行した。五十一年、藤沢理事長のとき、私は専務理事になった。重点事業の第一は、社団法人格の取得であった。創立以来十二年間の、先輩たちの事業活動の実績を礎にして、兵庫県知事から公益法人としての社団法人格を取得し、小野青年会議所から、社団法人小野青年会議所に組織変更した。

これを機に会員としての自覚と責任を再認識し、小野J.Cの存在意義と目的を不動のものとし、「社会と人間の開発」の事業を、より一層推進して「明るい、住みよい豊かな郷土」の創造に積極的に参画することを地域社会に宣言した。

ここに至る経緯は、藤沢隆弘理事長が次年度理事長予定者に決まってすぐの五十年十月、私

のもとに来て、「次年度に是非社団法人格をとりたい。ついては、専務理事にするから協力してほしい」と依頼、それを受けたことに始まる。

私は自分の浅学非才を理由に再々固辞したが、彼の並々ならぬ熱意に抗しきれず、とうとう社団法人格取得と真正面から取り組むこととなった。早速「社団法人格取得に関する研究」全五十六ページを冊子にして全会員に配布した。このときは、以前に大阪で元村月美先生の司法書士受験講座を受けていたことが幸いした。若いときの勉強に無駄はない。

社団法人小野青年会議所創立総会を五月六日の例会で行い、関連議案を審議して可決確定、これを受けて五月十九日、兵庫県に許可申請書を提出した。私はタイプ打ちをしてくれる事務局員を指揮して、書類の作成に一意専心した。兵庫県総務部文書課から六月一日付でその設立が許可されるという連絡を受けた。

六月一日には、藤沢理事長、河島君、栗林君らとともに、県庁まで許可書の受領に行き、翌日、神戸地方務局小野出張所に、申請人（専務理事）西村勝彦の名前で設立登記申請を行った。登記簿謄本の二ページ目に、設立許可の日 五十一年六月一日、五十一年六月二日登記、各ページの左下の申請人欄に押印した西村の印影は、私の誇りである。

社団法人小野青年会議所設立記念事業は、記念式典および講演会（九月十九日）関西学院大学グリーンクラブ小野リサイクル、リサイクル運動（図書持ち寄り）、小野青年会議所新聞・記

念版の発行であった。記念講演会は、関学同窓の森田君を再び窓口にして上坂冬子氏を招聘した。

関学グリークラブリサイタルは、十周年の理事長であった土肥芳郎会員が、元関学のグリークラブであったことによる。土肥会員からお借りした小磯良平画伯のデッサンを下地に素晴らしいポスターを作り、小野市民会館で昼夜二回公演を行った。

五百円の入場券が思うように売れず困ったが、所高校の同級生で、小野市内の中学校で音楽の教員をしていた服部さんに、中学生の来場をお願いし、会場いっぱいのリサイタルとなった。「土肥君と西村君の関学披露や」と言われたが、小野市で行ったグリークラブリサイタルは初めてで、関心も高く、多くの市民に喜んでもらえた。

リサイタル運動（図書持ち寄り）では、集まった図書を分類し、良書五百八十冊を小野市中央図書館に寄付した。その後も毎年資源リサイタル運動を提唱し実践した。資源ごみ回収国民運動の走りであった。

小野青年議所の法人格取得は、後に続く西脇、加西など各地の青年会議所の法人化の先例になった。この年度の社団法人日本青年会議所近畿地区兵庫ブロック協議会・会員大会において優秀重点事業推進賞を受けた。

この表彰文は、表彰の趣旨が詳細に記載されている。兵庫ブロックのどなたが表彰文を書い

てくださったのか知る由もないが、心のこもった素晴らしい表彰状であり、今でもコピーを保存している。税理士・行政書士を生涯の生業なりわいとして生きてきた私の青年時代の勲章である。

もちろん、この表彰状は小野青年会議所に与えられたものであるが、後に社団法人加西青年会議所から、私個人も感謝状をいただいた（五十八年七月）。創立總會資料や設立登記申請作成に対する助言が評価されたのである。この表彰状は、東大寺の昭和の大修理に使われた本物の大和瓦を、清水公照氏（加西市出身、東大寺管長、長老）の紹介で譲り受け、表彰状にしたものである。今でも事務所の応接間に飾っている。

#### 表彰状 優秀重点事業推進賞 社団法人小野青年会議所殿

貴青年会議所は 本年創立十三年目を迎え地域社会の公益の実現を目指し 社団法人格取得を推進され 社団法人格取得特別委員会を設置し 民法の研究・定款の研究・先例の研究に取り組み 県当局の指導する先例定款とは大きく異なる日本青年会議所標準定款を基盤に 従来からの諸規定をこれに順応させ 何度も県当局との折衝し その合法性と運用面の実情と実績を主張し 標準定款に準拠した定款が 県知事より認可された事は 初めてのケースと評価されます。

また、貴重な労力と実績の上に「創立總會資料」をまとめられ ブロック内各会議所に

配布され 今後の社団法人格取得の新しい先例を作られたことは兵庫ブロック協議会として喜ばしく またこれを機に会員の意識を昂められ その自覚のもとに地域社会の発展に寄与されん事を願う ここにその業績を記念して表彰いたします。

一九七六年九月四日

社団法人日本青年会議所近畿地区 兵庫ブロック協議会会長 鴻池祥肇

※鴻池祥肇さんは、日本青年会議所会頭を務め、後に兵庫県選出の参議院議員に当選してからも、長く昵懇にした。

藤沢理事長が、なぜこの時期にJ.Cの社団法人格取得にこだわったのかよく分からないが、結果的には素晴らしい決断であったと思う。

五十三年七月、私は次の提案をした。この提案が実現することはなかったが、郷土の地方紙・新東播が採りあげ、ともに「小野加東はひとつ」で、主張を一にした。

小野・加東大ふるさとまつり考（JCニュース 昭和五十三年七月六日）

小野青年会議所のテリトリーは小野市・加東郡の一市三町である。その故あつてか、創立五周年を記念して始めた子供会ソフトボール大会のテーマは「小野加東はひとつ」である。そしてこのソフトボール大会も、今年で第十回目になる。そのたびごとに「小野・加東はひとつ」を訴え続けてきた。しかしながら、その効果たるや微々たるもの。馬の耳に念仏の観がする。

小野・加東は本当にひとつだろうか。首長も議員もあらゆる行政組織も、妙に均衡のとれたこの地域で「小野加東はひとつ」を合言葉に合併を唱えてみても実現不可能なことはだれもが承知している。

しかしながら、それでも、小野JCは「小野加東はひとつ」を訴え続ける。それは、ふるさとの人情と心は、「小野・加東はひとつ」でありたいと願う、考えようによっては郷愁のようなものであるかも知れない。

私は、特に研究した上でのことではないが、リラックス・タッチで次の提言をしよう。それは、小野・加東の人情とふれあいの祭り「小野・加東大ふるさとまつり」の提唱である。当世風にいえば「小野・加東グランドフェスティバル」開催への呼びかけである。

小野まつりは八月二十七日に行われる。滝野町は春と秋に滝野まつり、杜町は地藏盆に夏まつりを行う。これらはいずれも昔からある氏神さまのまつりではない。いずれも神さまのいな

住民の、住民による新しいお祭りである。これらに一〇〇万円、いやそれ以上の、市町の予算が使われる。私は、来年からこの祭りの開催日を夏の良き日に統一して、「小野・加東大ふるさとまつり」を開催しようと提唱したい。

その日はメイン会場で「大盆踊り大会」を行おう。花火大会をしよう。ミス小野・加東コンテストもよい。各地区のサブ会場では、地域の独自性を発揮した郷土芸能や、伝統文化大会をしよう。行政区画の違いを乗り越えて、旧加東郡のきずなを確かめ合おう。

小野市は「金物とそろばんの商業の町」、滝野は「公園の町」、社は「教育文化の町」、東条は「湖の町」。当然、どこも独立独歩、合併の必要性を訴える確たる根拠もその機運もない。

私は、小野・加東大ふるさとまつりを定着させることによつて「小野・加東はひとつ」が実現するのではないかとほのかな期待を寄せている。

※この年の八月二十七日、第一回小野祭りが挙行された。従来の見る祭りから、市民総参加の新しい発想の祭りとして行われた。小野J.Cもちびっこ広場を担当した。広場では、工作、夜店、飲み物、落書きの各コーナーともに大盛況であった。小野祭りは、現在まで続いており、北播一の素晴らしい祭りになっている。

この提案からしばらく経って、郷土の地方紙・新東播主幹の戸倉さんが同紙のコラム「記者

席」で採りあげている。

滝野町上滝野に住む西村勝彦氏（税理士）が、小野・加東の一市三町住民による「大ふるさとまつり」を提唱、反響を呼んでいる。（中略…私の提案をそのまま掲載）同氏によれば、これは、行政区画を乗り越え、旧加東人間の絆を確かめ合うためのものだという。

事実、この一市三町は、二十数年前までは、加東郡一五カ町村としてのあゆみが続けてきた。だが、町村合併という「政治劇」により、現在の一市三町になったいま、行政上は、小野市が市レベルで三木、加西、西脇市などとの交際が深まり、社、滝野、東条町は町レベルでの交際が行われるようになった。だが、ここに住む住民は行政上の交際とはあくまで無縁であり、となり村のよしみを通じているものの、小、中学校などの交流は市と郡単位に区切られている。西村氏の提案も行政抜きに住民間で考えてはどうだろう。

※加東郡三町は、平成の大合併で、十八年三月、加東市になったが、行政上、小野・加東がひとつになることはなかった。JCは、私が卒業して十五年後の創立三十周年を機に、名称を社団法人小野加東青年会議所に変更した。



五十四年一月、私は第十六代理事長に指名された。私が理事長に指名されて最初に行ったことは、小野J.Cのスローガンを「行動で示そう青年の夢とロマン」と決め、事業方針を立てることであった。十五周年事業実行委員長は中井君にお願いした。

記念事業は ①記念式典 ②後援会 ③夏休み子ども大作戦「小野・加東大キャンプ大会」  
④十五周年記念誌の発行 ⑤その他四クラブ合同交歓会、現職日本J.C会頭の例会招聘などを提案した。

この年は、第二次オイルショックが起こり、景気は低迷していた。私は、こんな時こそ青年が頑張らなくてはならない。悲観論が支配して明るい材料の少ない、考えようによっては何ら夢のない時代。こんな時代こそ、われわれ青年が最も青年らしく行動する真のチャンスありと自覚し、十五周年の節をむかえた小野J.Cの運動に青年の情熱を注ぎ、信念を持って行動を起こそうではありませんかと訴えた（J.Cニュース 五十四年一月六日）。

総数七十二名の会員が、八委員会に分かれ記念事業を分担した。「J.Cこの素晴らしき仲間たち」は、栗林洋一郎君の常套句であった。私の人生でこんなに素晴らしい一年はなかった。少し具体的に書いてみよう。最初の就任のあいさつは郷土の地方紙「新東播」に掲載した。

十五周年を迎えます（新東播 昭和五十四年一月一日）

新年あけましておめでとうございます。日ごろは私も小野青年会議所の運動に、深いご理解とご協力をいただいておりますことに深く感謝いたします。

激動と変革の時代で一九七〇年代がスタートし、途中オイルショックで構造不況元年が始まり、すでに五年越しの低迷がつづいております。昨今では、不確実性、不透明の時代そして、低成長、財政不安など危機の時代と悲観論が世間を支配しています。

私ども中小企業の経営環境も、最近では徐々ながら明るさを増してはいるものの、相変わらず厳しい状況が続いています。

こうした厳しい状況下で、私ども小野青年会議所は、創立十五周年の節をむかえ、また社団法人格取得後三年目に入り、より一層地域社会に密着した運動を展開し、公益の実現に寄与しなければならぬ重要な年をむかえました。

そこで本年は、事業を思い切つて厳選して、一つひとつの事業にクリーンヒット主義で対処し、十五周年記念事業を重点に活動を展開いたします。

まず創立十五周年を記念して、本年五月十三日（日）に、式典並びに講演会を開催いたします。式典は青年会議所関係者を中心に行いますが、講演会には著名講師を招聘して、これを一般公開いたします。

次に記念事業として、本年七月二十八日～二十九日に、自衛隊青野原駐屯地のご協力を得て、「夏休み子供大作戦」と称する大キャンプ大会を行います。これはテーマを「青少年に夢と感動の機会を」と定め、明治初年から昭和二十八年までつづいた旧加東郡十五ヶ町村の人情、風土、絆を確かめ合うことにより、「小野加東は一つ」を地域の子ども達とともに考え、かつ、参加青少年に、夢と感動の機会を与えようとするものであります。何分はじめての試みでもありますので関係各位には、絶大なご協力とご支援を切にお願い申し上げます。

例年行っております献血運動も、現在事務局に二一、〇〇〇ccの血液カードを保有して、不時の利用に備えております、これも青年会議所の会員のみが献血をするのではなく、会員企業や、家庭や地域のみなさま方へも参加を呼びかけ、運動の成果をあげたいと考えています。また、保存血ばかりでなく、本年は、会員の血液型や平常の健康状態を登録して、新鮮血の供給体制づくりを研究し、緊急やむを得ない場合の新鮮血供給への組織づくりを研究いたします。その他の社会開発関係の事業では「子どもを交通事故から守る運動」の一環として、春の交通安全標語入りポスターを募集して、これを発表、展示いたします。

また社団法人格取得を記念に始めたりサイクル運動（図書持ち寄り運動）も、会員からの死蔵書を集め、本年は滝野町中央公民館へ寄贈いたします。

創立十五周年の実績をもつ青年会議所に要求されること、それは、明るい豊かな社会の実現

と、公益の実現に寄与すべく信念をもって行動をおこすことだと考えます。私も青年会議所会員は、青年の夢とロマンを行動で示したいのです。大勢の人々のご理解とご支援と共感を得て、明るい豊かな社会づくりへほんの小さな足掛かりから行動を起こし、青年の夢とロマンを実現したいと思います。

地域のみなさまの日ごろのあたたかいご理解とご支援を心より感謝申しあげますとともに、本年も変わらぬご指導とご鞭撻を切にお願い申し上げます。

※小野・加東の住民にJ.Cの活動をPRした。J.Cは、少々青臭いが、頼もしい団体だと評価されていた。

五月十三日、福祉センターで記念式典と記念講演会を行った。風かおる緑まばゆい好天に恵まれ記念式典は、伊藤俊博君の「開会宣言」、栗林君の「J.C宣言」、「綱領唱和」、中井実行委員長の「あいさつ」、「兵庫ブロック会長あいさつ」、小林正巳衆議院議員の「来賓あいさつ」、「歴代理事長へ感謝状贈呈」、「理事長あいさつ」、河島壮七郎君の「記念事業発表」、田尻克彦君の「閉会宣言」が、昨日のここのように思い出される。来賓を除き、生涯付き合うことになる素晴らしい仲間のスピーチの競演であった。

記念講演は小林正幸君の担当であった。講師は超一級の講師を求め、松下幸之助、邱永漢、



小野青年会議所15周年記念式典での挨拶

糸川英夫、野村総研の著名エコノミストなどに、地元選出の小林代議士や日本JICを通じて交渉したが、日程や健康上の理由で実現しなかった。

一時は、経済・経営以外の講師選びも考えたが、私たちの希望が中小企業の経営問題であったので、三十三年「経営学入門」で爆発的経営学ブームを呼び起こし、大学やテレビ（慶応、NHK）で活躍されていた気鋭の学者、評論家の坂本藤良氏に決定した。

氏の兄が経営されていた家業の東京不二製薬（婦人美宝散）の経営を引き継いだものの、ライバル企業であった笹岡薬品（いのちの母）、津村順天堂（バスクリン）の競争に敗れ、市場から敗退していった過程を話された。敗軍の将が兵を語りながら「それでも経営学は役にたつ、経営は理論だ」と締めくくられた。

式典では、壇上中央であいさつをしている写真、講演会終了後の祝宴では乾杯をしている写真がJCニュースに掲載されているが、我ながら堂々としている。乾杯では杖を左手で持ち、右手でグラスを高く上げている。

記念式典が終わった翌月六日の例会に、社団法人日本青年会議所会頭井奥貞雄氏を招聘して、会頭のＪＣ論の講演を聞くことができた。井奥氏は後に千葉県選出の衆議院議員に当選された。七月は、小野加東大キャンプ大会を企画、準備を行った。全会員の力を結集して素晴らしいキャンプ大会になった。

参加者を募るために、ＪＣニュース、新東播、神戸新聞に以下の記事を掲載してもらった。

小野加東大キャンプ大会（目的とご案内）（ＪＣニュース 昭和五十四年七月六日）

社団法人小野青年会議所は、本年三月十日で、創立十五周年を迎えることができました。この十五周年を記念して行うメイン事業は、七月二十八日から二十九日にかけて実施する「小野・加東大キャンプ大会」であります。既に申込を締切り、小野・加東の小学五、六年生三三〇名の参加者の受付を完了し、その準備も記念事業部会を中心に、小野ＪＣ全体の重点事業としてあらゆる方面から着々と進めています。

このキャンプ大会主催の目的は次の二点にあります。まず第一点は、明治四年四月、廃藩置県と戸籍法の施行によって、現在の小野・加東（旧加東郡）が形づくられて以来、昭和二十八年十月、町村合併促進法の施行までつづいた旧加東十五町村の人情、風土、絆を確かめ合うことにより、「小野・加東は一つ」の願いを、地域子ども達とともに考え、温かい人間関係と、

心のぬくもりのあるふるさとづくりを訴えることであり、他の一点は、このキャンプ大会を通じて、参加者に、夢と感動の機会を与えようとするところにあります。

私ども小野青年会議所のいう「小野・加東は一つ」の主張は、昔そうであったからそれがよいという、単純な郷愁のようなものではなく、北は多可、西脇、南は三木、東は美囊吉川、西は加西と明確に区分された、加古川並びに東条川流域の地で、お互いに長年、手に手を取り合った雄郡旧加東の仲間同志が、ともに明るい豊かなまちづくりに取り組もうと集まり、この地に青年会議所を創立して以来、地域の子供達に毎年、小野、加東ソフトボール大会の事業を通じて、訴えつつけてきたことなのであります、

次に、現在の子ども達は夜の感動を知りません。毎夜、若干のテレビ観戦ではやばやと床につく。昔はこの地方には、お便所が戸外にあったため、深夜の空の深い黒さや、月夜の感動を味わったものでありますが、今はもうそれもない。まして、朝日の昇る、まさに夜が明けようとする瞬間、黎明の感動はまるで知らないのです。

土の上に寝る経験も飯盒炊きさんや、たき火を囲んで仲間と歌を歌うチャンスも、キャンプにおいて他にない。私たちは地域の子ども達とともに、このような野外活動のよろこびと感動を分かち合おうと願うのであります。ややもすれば、キレ者だけが優遇される頭社会にあつて、夢や感動に対する心のたかぶり、ときめきといった感性のままに、一日を楽しく過ごしたいと

願っています。

今回計画したキャンプ大会は、小野JCにとって初めての企画でもあります。大規模であるため、万全の準備のもとに必ず、いや絶対に成功させなければなりません。この事業こそ、JCの実力が評価される大事業なので、会員各位の十分なる自覚と働きなくしては成功し

えないのです。

私は、今一度なぜこのキャンプ大会を行うのか、その目的は何かを明確にした上で、この事業がすばらしい成果を納めるよう会員各位改めて協力をお願いいたします。

最後に、参加者とその父兄に若干のお願いをしておきたいと思えます。それは、キャンプ大会は、内容そのものが野外活動であります。医師と看護婦に期間中常駐していただきますが、三三〇名の子ども達が集まってまいりますと、どんなに注意深く準備を進めても、小さなケガ、軽度の下痢、発熱を起こす子供が出ることも予測されます。家庭での事前の健康管理には特に厳しいチェックをお願い申し上げます。

純粹に、まじめに、そして全力投球で、主催者小野青年会議所



小野加東大キャンプ大会入場式



は取り組んでいるのです。協賛団体たる子供会連合協議会並びに後援団体たる教育委員会の暖かいご支援、ご理解に改めて感謝の意を表します。

附…小野市・加東郡のなりたち（新東播 昭和五十四年七月二十五日）  
小野・加東の地は加西も含めて奈良時代に播磨国賀毛郡かものこむらと呼ばれ、同時代に中ごろ天平年間に賀茂と改められた。

だが、平安時代の末期から鎌倉時代の初期にかけ、この賀茂郡を二つに分け、賀茂東郡かもしがしと賀茂西郡と呼んでいたが、これを略し、賀東郡かとうぐんと賀西郡と呼ばれるようになってきた。そして江戸時代の初めから賀東郡が加東郡と記入されるようになったが、一柳藩（小野）丹羽藩（三草）のほか、姫路藩の領地や旗本領などが複雑に入り組み、加東郡としてまとまったものではなかった。

明治維新のあと廃藩置県により兵庫県が発足したが、たびたびの行政組織の改変が繰り返され、明治十一年に兵庫県加東郡が発足し、郡役所が、いまの社町に設けられた。同二十二年の町村制施行から加東郡十五カ町村が誕生、約七十五年間もこの時代が続き、昭和二十八年の町村合併促進法施行のあと、二十九年の滝野町と加茂村の合併をきっかけに町村合併が進み現在の小野市、加東郡の社、滝野、東条（現在の加東市）を形成した。

みんな集まれ！小野加東大キャンプ大会（新聞報道）（新東播 昭和五十四年七月二十五日）

キャンプは、午前七時三十分から現地を受け付けをした。バス四台をチャーターし、東条町は役場前、滝野町は東小学校前、杜町は庁舎前、小野市は市役所前からそれぞれキャンプ場の自衛隊青野ヶ原駐屯地の演習場に子ども達を運んだ。当日の実参加者は二百二十六人で、会員を含め二百五十人が青野ヶ原の灌木林で野営した（会員はリーダー二十四名を除き、深夜に帰宅し、翌朝早くキャンプ村に戻って来た）。

二十八日九時から開村式を行い、続いてキャンプ村づくり、昼食の後は楽しい時間で、レクレーション（ゲーム）、午後四時から夕食準備、五時三十分から夕食、七時から「カウンセラールと語ろう」があつて、八時からキャンプファイアー。十時三十分就寝。二十九日は、午前六時起床でラジオ体操、六時三十分から朝食準備で七時三十分朝食、八時三十分から再び楽しい時間、十一時になると感想文を書き、身辺整理、昼食後、閉村式を行い、再びバスで各乗車地に送った。

現在では各地にすばらしいキャンプ施設ができていますので、わざわざ青野ヶ原の灌木林で、危険と隣り合わせのキャンプ大会を計画する人や団体はない。私は最初に、医師で会員の赤羽目勉君に二十四時間常駐のお願いをした。一番恐れたのはマムシの被害である。彼によれば、

早く気がつけば一〇〇パーセント問題ない。「西村さん、大丈夫」とのこと。勇氣一〇〇倍、自信が湧いてきた。キャンプ場は、前日に草刈りをし、重機を入れて大きな音をさせているのである程度安心していたが、私の家族からは「大切な人さまの子どもを預かって突拍子もないことをするものだ」と批判され、心配させた。

いざやり始めてみるとJ.Cは人材の宝庫である。会員がそれぞれ適材適所で、力を發揮して、有機的、効果的に役割を演じてくれた。

・中井、小林、栗林の三人の副理事長と田尻専務理事で本部機構をガッチリ固めた。

・キャンプ大会の、直接の担当は横山青少年問題委員長、サブに藤原教育問題委員長が当たった。

・リーダーの養成は専門家（柏原氏・加西市）の指導を受けた。加西市の普光寺で、全会員がキャンプリーダーの本格的講習を受けた。

・教育委員会への後援依頼、自衛隊青野ヶ原駐屯地への協力要請、消防署への救急体制依頼、警察署へ交通関係の届け出、電電公社への臨時電話架設依頼、等々外部関係者の多さと、ことの重大さに改めて驚いた。

・キャンプ場づくりのため、本岡君、山本君、山田君がそれぞれ大型ユンボ、ブルドーザー、刈り払い機を持ってきてくれた。灌木林の中に、大きなキャンプファイアー場を造った。

・キャンプファイアーに用いる木は、松井君が国鉄から古い枕木を貰ってきてくれた。とても立派なボンファイアーになった。分火のトーチは参加者が作った。枕木は一晚では燃え切らず、燃えカスとごみは大きな穴を掘って埋めた。

・非常時の発電機は田村君が持ってきてくれた。

・臨時便所二か所は、依藤君が作ってくれた。見事な便所だった。

・参加者募集のポスターのイラストは、岸本君が出入り業者に書かせて持ってきてくれた。

・看板、旗、のぼりは黒石君が作ってくれた。逆L字型の素晴らしいキャンプ村の旗ができた。

・食物の準備は神吉君がしてくれた。飯盒炊さんの米が足りなくなり小林君がすぐに手配して米搗きをしてきてくれた。

・キャンプ大会の入場行進で、村長である私は磯野君が持ってきてくれた真っ赤のモーニングを着て、横山君が持ってきたジープに乗って入場行進をした。私が、先頭に歩いて行進できないので横山君らが考えてくれた妙案であった。

・キャンプカウンセラーは、リーダー研修を受けた粟生君ら二十四名が子ども達を指導してくれた。

・キャンプ大会実施直前に、伊藤君がラジオ関西のトーク番組に出演依頼をしてくれた。私は、須磨にあるラジオ関西のスタジオの生放送で「夜明けの感動」について話した。

・広報写真や記録の目立たないところで、藤原君、宮脇君が活躍してくれた。

・村長である私は何をしたか。後々よく考えてみると、駐屯地の駐車場からキャンプ村に行くだけでもジープを使った。キャンプ村中央の本部テントに陣取ってみんなの活動を見守っていた。

全会員が一致協力して汗を流した。文字通り力いっぱい体当たりであった。キャンプが終わって、参加の子ども達をバスで各地へ送り帰すときには涙がでた。

キャンプが終わって二日間、参加者や保護者から、けがや下痢の報告が一件もなかった。ようやくキャンプ大会が終わったと実感した。

夢とロマンの大キャンプ大会。まさに行動で示した青年の夢の終わりであった。今この子たちはどうしているのだろうか。

莫大な手間ひまをかけ、大粒の汗を流し、全会員の英知と勇気と情熱を結集し、果敢な行動に精魂こめて、青年の碑いしぶみ「青年の夢とロマンと感動のJ.C」を実感した。みんな、みんな本当にありがとう。

※この事業は、九月二十三日、伊丹陸上自衛隊駐屯地内で行われた兵庫ブロック会員大会で最優秀事業推進賞を受賞した。

キャンプ大会を終え、八月の家族例会は、八月四日、五日の二日間、「三朝ロイヤルホテル」を全館借り切つて夏休みファミリー大会を行った。参加者五十家族、一七三名の会員と家族が大型バス四台で三朝温泉に行った。鳥取砂丘、鳥取子ども国、蒜山高原を経て、ホテルでは楽しい宴会、ショー、花火大会などを行った。担当の吉本君、丸山君、井上君らが、この事業はキャンプ大会の陰に隠れて、日蔭の朝顔だと言っていたが、本当は真夏に咲いた大輪の朝顔の素晴らしい事業であつた。

十月五日、献血、新鮮血相互供給体制の普及とPRのため「小野・加東献血友の会」を設立して会長になつた。

十月十三（土）～十四日（日）に指導力委員会のリーダー研修会を、宇治黄檗宗総本山万福寺で開き、座禅を行った。十二月六日の最終例会は、宝塚グランドホテルで行つた。

**理事長年度の一年を振り返つて**（JCニュース 昭和五十四年十二月八日）  
あつという間でした。創立十五周年という記念の年の理事長という晴れがましくも身にあまる光栄と、その重荷を受けて、この一年間、私の長い人生のたつた一年間と思えばこそ、その一コマ一コマと精一杯取り組んでまいりました。

一月から三月までは、何が何だかよく分らないままに理事長になり、四月には、公式訪問、

五月には、小野・加東子供会ソフトボール大会、十五周年の記念式典並びに講演会、六月には、井奥貞雄日本青年会議所会頭招聴、七月には、小野・加東大キャンプ大会、八月には、夏休みファミリー大会、九月には、青年重役会、十月には、小野・加東献血友の会連絡協議会発足への提言等々主な事業だけでも随分と忙しい一年でありました。

しかしその間に私が理事長としてなし得たことは、基本方針の樹立と、各事業のはじめに挨拶をし、その終わりに感謝の言葉を述べる幕引きの役目と、若干の代表者としての渉外のみでありました。これ偏に、中井、栗林、小林の三人の副理事長と田尻専務理事というよき賛同者を得た上で、彼らの適切な事務分掌によるすばらしいリーダーシップの發揮と、委員長諸賢による委員会結束のすばらしさによって成し得たことであります。

この一年間に理事長だからこそ、味わうことができた貴重な体験と、理事長だからこそ、会うことの出来たすばらしい人生の出会いの中から感じたことを二点だけ述べてみたいと思いません。

一、青年は青年らしく信念をもって行動しよう。

世の中には、はじめから合理的で完全な信念などあろうはずがありません。大切なことは、熟慮の結果、やろうと決めた以上、ドンと体当りしてゆく気概こそ必要なのです。今年はこのことを、身を持って体験したような気がいたします。

水も、電気も、その他一切の施設のない原始の青野原灌木林に、二三人もの子ども達を集めての大キャンプ大会という、過去にだれも試みたことのない事業に「青年の夢とロマン」を示そうとしたキャンプ大会には、われわれのよき理解者である識者の中からさえ批判を受けました。しかし十分な準備と研究をすればきつとできる。たかがこの位のことでもヘコタレルカという気概を持ち続け、打たれても、打たれても出る杭になり、常に新しいものに挑戦する勇氣を失わなかった記念事業部会のメンバーの努力と、全会員の協力支援に改めて感謝の意を表したいと思います。

その上、この事業の成果が認められ兵庫ブロックの最優秀重点事業推進賞の栄に輝いたのは望外の幸せという他ありません。

二、世間は広く、知識は深く

坂井知事が兵庫ブロック会員大会の席上、「JCはエリートたれ」と申されました。私は今のJCがエリート集団だとは決して思っておりませんが、エリートたらんことを期待されていることは事実であろうと思います。そのために常に厳しい自己鍛練を必要といたします。企業人として、社会人として、世間を広くし、知識を深くする絶えざる自己鍛練こそ今の私たちに一番求められていることではないでしょうか。

一年間をふりかえって、今年一年間、理事長を務めさせていただいて本当によかったと心か



ら感謝いたしております。

今後とも常に初心にかえり、恩師青木倫太郎先生の教えであるかくれたる闘志を発揮して、不断の努力を続け、やさしい人柄を心掛け、また次なる新しい目標にむかって挑戦して行きたいと思います。

J C会員のみなさまをはじめ、われわれのよき理解者である地域社会のみなさま、本当にありがとうございます。

理事長を務めた二年後の五十六年十二月、私はJ Cを卒業した。

青年会議所卒業の弁（J Cニュース 昭和五十六年十二月六日）

人生の一回性に意義を認めるとすれば、たった一回のこの人生を力一杯生きたいと願うものである。安易で気楽な人生を選ぶか、精一杯生きる人生を選ぶか、全くその人の自由であるが、一定の教養と社会的評価（地位）を前提とする限り、いつも後者を選ぶように自戒したいものである。

ところで、何を求めてこの人生を生きるかとなれば、その人の生い立ち、年齢、環境……によって異なると答えざるを得ない。私はそれをJ Cでは、「夢と口マン」だと言いつづけてきた。

この言葉のもつイメージが甘酸っぱくて、軽薄だと言われれば、それにかわる別な言葉におき換えてもよい。要は、青年時代に考えたすばらしい人生目的や信条等を、いつまでも、いつまでも持ちつづけたいものである。

※私がJICを卒業して三十年、その後JICの活動がどのように展開されたか。現在どのような活動を行っているか、詳細はよく知らないが、JICが「小野加東はひとつ」を事業活動のテーマとしてきたことと、公益法人であることだけは忘れてほしくない。